

同窓会研修旅行に参加して

高十三回卒 平野 昭江

今年の同窓会研修旅行は「茨城を訪ねて」というテーマで、那珂湊方面に行きました。

九月二十五日、雨が降って寒い朝でした。参加者は二十七名でした。氏家より十八名乗車し、ララスクエアより九名乗車し茨城方面に向いました。

バスの中では校長先生、旅行係の先生、会長、来賓紹介等などがありました。又安全運転手のならさん、バスガイドの竹岸さん、吉本興業から派遣されたガイドさんかと思う程、参加者全員が腹の底から笑わせられて茨城空港に退屈せず着きました。

茨城空港は二〇一〇年三月十一日開港した、日本で一番新しい空港です。国内外で一番小さい空港です。定期便として茨城・ソウル(仁川)線(アジア航空)、茨城・神戸線(スカイマーク)があり、案内人の岡野様の話によりまずと、九十八番目に出来た空港だそうです。滑走路は羽田が一km有りですが、茨城は百二〇mと短いそうです。無料駐車場を完備し、出発、到着ロビーを一階に集約した、シンプルで解りやすい設計にしてあると話していました。搭乗時の移動が短く高齢の方、車椅子の方にも快



シャッターカメラにて

適に利用出来るサービス施設、広い送迎デッキを設け、寛げるようになっていっていいました。小雨が降っている中に見学でしたが、ゆつたりと静かに、人にやさしい施設を見る事が出来ました。警察の方も常時一人おるとの事です。とてもどかな空港と思いました。

昼食は国指定の重要文化財のシャトーカミヤの園内で日本料理の富貴洞で乾杯後、庭園をながめながら楽しいおいしい和食の食事を致しました。

次に弘道館の見学です。水戸藩九代徳川斉昭によって創設されました。優れた人材の育成を目指して、天保十二年(一八四一)文武修業の場である弘道館を仮開館式が挙行され、十五年余の年月を要し一八五七年に本開館式を迎えました。藩士とその子弟が学び、学問と武芸の両方が重視

され、卒業はありませんでした。雨やみで緑さえたる弘道館

歴史たつぷり心満たさる

帰路のバスの中では和気あいあいカラオケで、歌謡曲、なつかしい叙情歌、高校の校歌等楽しく過して来しました。又ガイドさんに楽しませていただきました。

朝から想像もつかない程のきれいな夕やけをみながら、校長先生、旅行係の先生、羽田観光様、東野バス様から、終わりの御挨拶をいただき本当に充実した楽しい研修旅行が出来ました。皆々様本当にお世話になりました。ありがとうございました。雨ざりて車窓より見る夕やけに 歓声の声それぞれ揚げて

部活動の思い出

旧職員 吉沢 道也



着任のあいさの折、体育の先生から「本校の女子バレー部が県新人大会で優勝したのだが、その先生が転勤というこになつてしまった。その後の指導をぜひ若いあなたにお願いしたい。」とのことであった。体育の授業での指導こそできても、部活動における指導はまた別もので、まして優勝チーム

であればその責任をも含め、とても自信などないと丁寧に断りするより他はなかった。

大学を卒業し、意気揚々と初めて教壇に立った時のさわやかな思いは、いまだに忘れどことはない。授業が待ち遠しい、放課後の部活動(柔道)での触れ合いが楽しい、私の心は常に生徒達に新しい刺激を貰いながら充実感にあふれていた。数名の部員であったが三、四年後には六十名を超す大所帯となり、目標としていた関東大会にも二年連続出場した。

五年間勤めた、そんな足尾高校を後にして氏家高校に着任したのは昭和四十二年四月だった。

前任校での自分なりの実績を、ある程度評価されるかもなどという甘い考えは許されるはずもなく、改めて校長先生から「ぜひ女子バレー部の監督をお願いしたい。」とのことであった。学校全体を考えれば致し方のないことであつたのだろう。私は、部員の前で「私でもいいか?バレーボールは得意ではない。」と念を押しつつ顧問としてスタートを切つたのだが、どうもがごとくともよい関係も生まれず、力を伸ばすなどというこには至らず、指導力のなさを痛感するばかりだった。ただその時の一、二年生が、レギュラーである三年生に対し敬意の念を抱きつつ一生懸命付いていった。そのひたむきさと真剣なまなざしに心を引かれるものがあり、私は「この子達と、とことんバレーボールをやってみようか」とも思った。しかしいろいろ考えた結果、生徒達には「一緒にやってみようか、もしバレーボール専門の先生が転勤して来られた

ら、俺は柔道部に移る。」と伝えた。翌年度図らずも顧問交替となった。

あの時の一、二年生達が高校を卒業して何年目ぐらいたつたろうか、仲間達と新年会をやるから、先生も出てきてほしい。」との連絡を受け出席した。以来すでに還暦を迎えようとしている今日まで欠かさことなく、欠席する者もなく続いているのだから凄いい。何年経つても、何回繰り返しても飽きることなく氏高旧体育館の黒光りしたフロアーの色と、汗のおいを恋しく思うのであろう。そして結ばれた仲間達との絆は、年ごとに強くなっていくようにさえ見える。まさに苦楽を共にしながら部活動をやり通した者達に与えられた宝物のようだ。私自身たつた一年間の顧問であったが、この経験が長い教員生活の大きな支えとなつていなくてはならない。

その後、氏家高校には十七年間お世話になることとなったが、柔道部の顧問としてやりたいようにやらせていただいた。校庭の隅の方に勝手に土俵を作り相撲競技にまで手を伸ばし、インターハイや国体など対外的な試合に、多くの生徒達を参加させることができたことは感慨深いものがある。多感なる高校時代に心身を鍛える「部活動」の意義・価値は一言で言い尽くせるものではない。「体育」の傍ら部活動に心を込め一生懸命になれたことは、私にとって大きな充実感であり、誇りでもあった。

いま、氏家高校の卒業生達が、いろいろな分野で活躍している姿に触れるにつけ、あの時代がどのほか懐かしく思い出される。